

## 森林を守り、育て、活かし、豊かな森を未来に引き継ごう



### ■表紙写真

題名：「カブトムシ見つけたよ」  
撮影地：県立森林公園 森の家  
撮影者：繁信 裕輔（大阪狭山市）

本誌のバックナンバーは、静岡県山林協会ホームページでご覧いただけます。  
ホームページには、林業への就業を考えている方の参考になる記事も掲載しています。

URL：<https://www.moritohto.jp>



## INDEX



**2 支部だより①**（東伊豆町 観光産業課）  
東伊豆町ってこんなところ



**3 支部だより②**（清水森林組合）  
教わる側に寄り添う指導員を目指して



**4.5 地域の取組**（南伊豆地域森林活用推進協議会）  
地域のプランナーが牽引し、林業経営体連携の取組を展開！



**6 県庁だより①**（経済産業部 森林・林業局 林業振興課）  
県産材製品の需要拡大に向けた取組



**7 県庁だより②**（くらし・環境部 環境局 自然保護課）  
捕獲の担い手の確保・育成に向けて



**8 本部情報**  
令和5年度第4回理事会及び県森林・林業関係幹部職員との意見交換会の開催  
木質化で協会の執務室が見違えるような空間に変身！

# 支部 だより①

## 東伊豆町ってこんなところ

### 東伊豆町 観光産業課

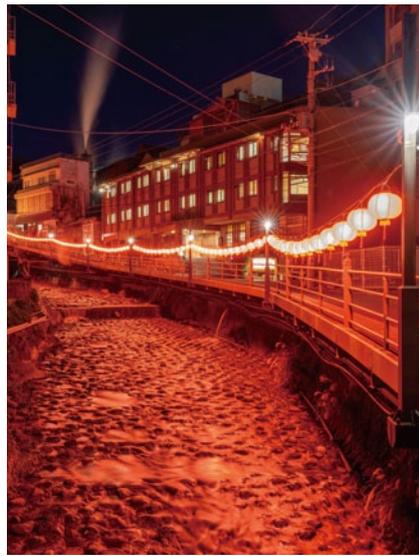
豊かな自然に恵まれた東伊豆町の魅力について紹介いただきました。

東伊豆町は、伊豆半島東海岸の中央に位置し、天城の山並みを背に、伊豆大島をはじめとした伊豆七島を望み、豊かな自然に恵まれた人口約1万1千人のまちです。総面積は77.82km<sup>2</sup>、林野率約75%、平均気温は約17℃の温暖な気候で住みやすいところです。熱川や稲取を代表とする6つの温泉郷からなる伊豆屈指の湯どころとして栄え、伝統文化の「ひなのつるし飾り」や、稲取細野高原のススキ等もお楽しみいただけます。ブランド金目鯛「稲取キンメ」をはじめとする海産物や、ニューサマーオレンジなどの柑橘類、カーネーションなどの花卉類を中心とした農業をベースに、美しい自然環境と豊富な温泉、海の幸・山の幸に恵まれた観光産業が主幹産業となり、年間80万人を超える方が宿泊し、1年を通じて賑わいを見せております。

#### 熱川温泉

新たな観光スポットとして、台湾の観光地・九份(きゅうふん)を模して現地と同じ「台湾提灯」を常設しています。

九份は映画「千と千尋の神隠し」の世界観とイメージが重なる場所として広く知られています。熱川温泉のすり鉢状の地形と広さが九份と似通っていて、幻想的な風景を、湯けむりと台湾提灯が、とけあう東伊豆町の熱川でお楽しみいただけます。



▲熱川温泉提灯(九份)

#### 稲取細野高原

国道135号線から車で10分ほど山手に入ると目の前に広大な高原が現れます。観光スポットとして人気を集める「稲取細野高原」です。面積は約125ha、東京ドーム26個分の広さを誇ります。

春は山菜狩り、秋は黄金色に輝く一面のススキ野原、そして一番のおすすめは、隣接する三筋山の山頂から伊豆七島を望む大パノラマ眺望です。他では見ることができない絶景ポイントとなっています。



▲稲取細野高原(ススキ)

#### 海の幸・山の幸

全国的に知名度が高い「稲取キンメ」は、「日本一おいしい金目鯛」として高い評価を受けています。エサが豊富な近海の漁場で獲れる稲取キンメは、肉厚で脂がのり、その味は全国の食通をも唸らせます。主に煮つけや刺身、焼き物で食されていますが、近年は「しゃぶしゃぶ」が人気を博しています。

山の幸では、ワサビやミカン、イチゴの栽培も盛んで、地場のものを利用した加工品も作られ、特に「みかんワイン」は、地元のホテル・旅館などにも利用され好評です。



▲稲取キンメ

#### 東伊豆海のみえる農園

稲取高校から西に400mほど離れた高台に、日帰り型市民農園と滞在型市民農園があります。市民農園からは相模灘や伊豆七島が望め、大変景色の良い場所となっています。また、野菜作り等を通じて地域住民と都市住民との交流の場にもなっています。



▲市民農園

ぜひ伊豆にお立ち寄り際には、東伊豆町のレジャー施設はもちろんのこと、大自然にふれあい、楽しい思い出を作っていただければと思います。

# 支部 だより②

## 教わる側に寄り添う 指導員を目指して

清水森林組合 天野彩太郎

指導員活動を通じて感じていることなどについて紹介いただきました。

### 指導員になったものの

当組合は、平成25年から「緑の雇用」担い手確保支援事業を通して、研修生の雇入れを行い今日に至ります。指導員として携わって7年弱、右も左もわからぬ新人さんに対し、現場合わせで行う指導は想像以上に煩雑です。

自身の技術と語彙力の乏しさが招く伝え方不足はさることながら、指導員と研修生という関係性の構築にも苦慮し、自問自答を繰り返す毎日。指導と相反する現場の進捗について指摘され、わかっちゃいるけれども体験をしているのは私だけでは無いと思います。「この指導で良いのか!？」問題は常に付きまとい、交流の場を求めたくても、既に経営体の中心人物として忙しい日々を送る指導員クラスの方々はお互い時間は無いが周りの状況は知りたいというのが実情ではないでしょうか。

現状、各経営体の中だけで井の中の蛙状態で行われている各々の指導。林業従事者の人材不足の陰に隠れ



て、指導員の量と質の向上も喫緊の課題だと感じます。どちらの人材も絶やさぬよう、紡げるよう、フォローアップを含めた人材育成研修の創設と交流、成長の場が必要ではないかと考えます。

### 基本と自己流

伐木作業は地理的条件等数多ある状況を判断し最適解を探す難解な作業です。伐木作業を簡単に文章化すれば、対象木に向かい、木の癖を読み、重心を判断し、対象木の重心移動の軌道変位中に対象木の枝と周囲の残存木の枝が軌道に及ぼす影響を加味して伐倒点を選定し、伐木方法を決め、伐倒補助具を準備し、退避場所と経路を確認し、伐倒点に向け受け口を作り、追い口を追い、ツルを作り、重心移動を行い、退避し、伐倒後は退避場所から上部を確認し、材の安定確認となるでしょう。合図、手順の抜けがあることは紙面の都合上ご容赦願いたいですが、伐木の理想は上記手順の勘案と作業中の立ち位置、切る位置、叩く位置、かかり木が想定されるならどのようにかかるのか、どう処理するのか。敢えてかけてからツルを調節し軌道を変えるのか。かかり木さえも全て自分の想定内に行い、自身の安全も含め木を寝かすことだと思います。

しかし、経験を積み作業に慣れると、

手順は経験を担保に一部省略され、または加えられ、自己流に変わります。技術追求を悪とは言いがたいですが、教わる立場はいずれ教える立場に変わります。その時、教えるのは自己流ですか?逆にその時、基本に立ち返った作業はできますか?



### 教わる側に寄り添う

指導中、伝え方と伝わり方はイコールではないのが不思議です。熱い指導は自身も高揚しますが、思うほど伝わらず、試行錯誤を繰り返すもやはり伝わりません。停滞するどんより空気の中、新人さんの顔には不安や焦り、悔しさ、もどかしさが滲みます。情熱はいつしか苛立ちに変わり、「お前、こんなことも」と声を荒げる刹那、一番辛いのは早く覚えたいのに出来ない新人さんだということを忘れてはなりません。

そこで投げ出す前にもう一步寄り添える言葉を探したい。伝わらない理由は伝え方に問題があるかもしれません。理解できない新人さんの一番の理解者は指導者であってほしいと思います。今教えている新人さんは指導員を見ている。いつかは指導員になります。その時、教え方や伝え方は伝染すると思います。私の指導した新人は誰かの指導員になり、良好な人材育成が紡がれていくことを期待しています。

# 地域の取組

## 地域のプランナーが牽引し、 林業経営体連携の取組を展開！

### 南伊豆地域森林活用推進協議会

県賀茂農林事務所管内で活動する5つの林業経営体で組織する「南伊豆地域森林資源活用推進協議会」取材しました。協議会の事務局を担当されている伊豆森林組合 業務係 森林施業プランナー 正井秀治氏と、協議会活動をサポートしている静岡県賀茂農林事務所 森林整備課 主査 伊藤允彦氏にお話を伺いました。

#### 協議会概要

南伊豆地域森林資源活用推進協議会(以下協議会)は平成26年10月に設立されました。会員は伊豆森林組合、有限会社愛美林、株式会社いなざさ林業、株式会社いしい林業、チーム北見フォレストワーカーズです。加えて、伊豆森林管理署、県賀茂農林事務所、下田市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町の1市5町がアドバイザーとして参加し、行政との意見交換も行われています。

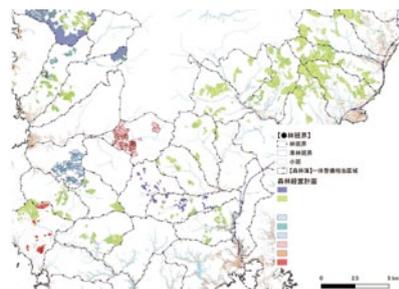
会の目的は、地域資源の有効活用、会員同士の情報共有及び伐出技術の向上による森林所有者の収益向上、及び木材生産量の増大です。このために、需要先の確保とニーズ情報共有、年間の素材生産計画の情報共有・生産調整、丸太生産技術の向上と共同作業の推進、森林経営計画策定に必要な情報共有・調整、さらにこれらに関する研修会開催に取り組んでいます。

通常、ライバルでもある林業経営体同士が情報を共有するということはどういことだろうと、不思議に感じます。さらに、これらを実行する手段としてデジタル技術を積極的に活用している点も特徴でした。以下に具体的な活動内容をご紹介します。

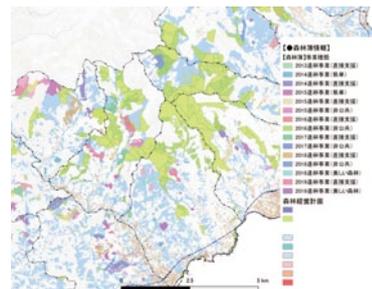
#### QGISを利用した森林経営計画の共有

協議会では各経営体が契約した森

林経営計画作成箇所についてQGISを利用して情報共有をしています。まず、事務局がオープンデータ等を基に共通のフォーマットを作成しました。背景地図は国土地理院が公開している基盤地図情報(道路線、等高線、建築物、海岸線等)を基に作成し、林班界情報(林班、準林班、林小班、一体整備相当区域)、森林情報(樹種分布、自然公園、保安林、施業種、施業履歴)、国有林情報(小班、樹種)のレイヤを付し、これに会員ごとの森林経営計画作成箇所を表示するレイヤを加えています。



▲会員ごとの森林経営計画等の表示画面



▲施業履歴等の表示画面

このシェープファイルは会員のみがログインできる協議会HP内の専



▲正井氏と伊藤氏

用ページで共有しています。ここまで聞いて、不思議に思う方も多いのではないのでしょうか? 営業活動エリアが被っている事業体同士が、それぞれの施業林地、すなわちお客様やお客様との取引内容について情報を共有しているというのですから。この情報共有を行うメリットは、プランナー業務の効率化が計れる点だと言えます。プランナーが営業活動を行う中で、すでに他の事業体と契約をしている森林所有者へ足を運ぶという無駄な動きを無くすることができます。もちろん、いずれの事業体とも契約されていない山林について営業がバッティングすることは十分に考えられます。しかし、契約ベースの情報をリアルタイムに共有することは、隣地についての協力や手が付け難い所の整備を他事業体に依頼する等の調整がし易くなり、加えて、プランナーが変わったとしても情報の引継ぎが可能となります。「行政から見ると、情報が見える化されたことでエリア全体が活性化したことが判ります」と伊藤氏。経営計画の作成が活発になり、管内の木材生産量目標(2万5千 $\text{m}^3$ )を令和5年に概ね達成したこともつながったと言います。

#### 労働力の確保・調整

本年度はそこからまた1歩進んだ連携を始めています。各事業体のスケジュールを共有することで、現場作業の労働力のマッチングを計ろうという取組です。現在、Googleドライブを使用し、各事業体の月ごとの生産量と森の

力再生事業については、いつ、どこで、誰に下請けを頼んで、何人で、そして実際に施業が行われたかまで表に落とし込んでいます。

この情報共有により各事業体の現場のちょっとした余裕の把握が可能となり、短期的にもカバーし合う、隙間バイトのような取組により仕事の平準化を目指します。また、賀茂管内での森の力再生事業の目標面積について、現在予定している面積から足りない部分をどう調整つけていくかを協議会内で話し合うまでになっています。

### デジタル技術活用による情報共有

協議会は分科会と本会を開くことで運営されています。分科会は各事業体のプランナーが2ヶ月に1回程度の頻度で集まり、そこで挙がった議題を検討し最終的に経営者による本会で決定するという流れになります。

分科会は、プランナー同士のコミュニケーションの場という側面があり、雑談も含めて実践的な情報共有が行われています。例えば、測量した結果をシェイプ形式に変換してQGISに紐づける方法を共有することで、QGISが格段に使いやすくなり、どの事業体でも活用するようになったと言います。他にも、労務管理をグーグルフォームで行う方法や、アプリ(Avenza Maps)を使用することで携帯電話の電波の届かないエリアでも位置情報付PDFから森林簿情報等を確認する方法など、すぐに使える技術情報の交換が活発になされています。



▲スマホアプリの活用

「ICTと言うと、どうしてもドローンなどの派手なものに目が行きがちですが、今の自分達の業務に直結する情報を共有している点が良いと思います。」と伊藤氏。もちろん、ドローンの活用も図っており、ドローンで撮影した画像をオルソ画像へ変換する際に、無料のオープンソースで行う方法や、伊豆森林組合で行ったドローンによる測量の方法や結果なども共有しています。各事業体が行った取組を『こんなことやったよ』と報告し合える場でもあるのです。協議会の存在が、エリア全体のデジタル化を推進していると感じました。



▲ドローンの活用

### 地域の山の未来を本気で考える

発足当初から活発なコミュニケーションが行われていた訳ではありませんでした。しかし、賀茂地域は市場からは遠く、地形は急峻で、他地域に比べると広葉樹が多いという、厳しい条件を有する地域ということもあり、競い合うだけでなく、令和元年度頃からみんなで課題を共有し対策を講じていこうという流れになったと言います。「各事業体の利益を確保した上で、賀茂管内全体を共同でプランニングできるところまでいけたらと思っています。」と正井氏。お互いに課題を共有することで、賀茂管内の現状を理解することができ、それにより自分達が目指すべき方向が定まってくるのではないかと考えているのです。

「協議会では誰もが自分がやりたいこと、すなわち当事者意識を持って取り組み、プランナーは常に理想を求めようと言っています」と正井氏が

話してくださいました。全て手の内を見せる訳ではありませんが、ある程度見せられる部分は見せて、地域全体で地域の山の整備を本気で考えていく姿勢は、他ではなかなか真似できないことかもしれません。

また、主にプランナー同士のコミュニケーションが協議会の存在を大きくしていますが、現場作業員の繋がりも創造しています。プランナーに加え現場作業員も含め、ほぼ全員が参加する合同安全大会を令和5年12月に実施しました。事業体をまぜこぜにしてグループ分けをしてテーマについて議論するため、現場技術者間でも顔の見える関係が築かれ始めています。



▲合同安全大会

### 今後の展開

今までは個々の経営体が市町へ施策等を要望していたものを、今後は協議会、すなわち地域の事業体の総意として市町へ働きかけることをしていきたいと考え、手順等を模索しています。先駆的な市町の施策の具体的な成果を把握し、これを元に他の市町へ同様の制度の創設を働きかけることや、間伐は行われているが皆伐・再造林が厳しい場所について支援を求めるなど、不採算林地について考えていくようです。

また、広葉樹の利活用についても課題として検討していきたいと考えています。まずは実務レベルで取り組めることをみんなで考え、取り組んでいこうというのがこの協議会のスタイルであり、他とは違う価値を生んでいる点ではないでしょうか。



# 県庁 だより ②

## 捕獲の担い手の確保・育成に向けて

くらし・環境部 環境局 自然保護課

研修会の開催など捕獲の担い手の確保・育成の取組について紹介いただきました。

### はじめに

静岡県での野生鳥獣による被害の大半がニホンジカやイノシシによるもので、被害額に現れる以上に、農林業者の意欲の減退や、荒廃農地及び荒廃森林の発生につながるなど、農林業や生態系に深刻な影響を与えています。

こうした中、人と鳥獣とが共存していくためには、加害個体や増えすぎた個体の捕獲といった鳥獣の管理が必要となります。

しかし、鳥獣の捕獲に従事される狩猟者の高齢化が進んでおり、今後、捕獲の担い手不足や狩猟技術が若い世代に継承されないことが懸念されます。

このため、県では、捕獲の担い手の確保・育成に取り組んでいます。

### 学生向け狩猟免許試験予備講習会

若い世代の担い手確保に向け、大学生や高校3年生（狩猟免許試験は18歳から受験できます）等を対象に、狩猟免許試験の予備講習会を実施しています。

令和5年度に開催した講習会では、川根本町で狩猟を行う地域おこし隊の2人が講師として、若者の視点で狩猟の魅力を紹介した後、筆記試験対策や狩猟可能な鳥獣か否かを瞬時に判断する「鳥獣判別」、狩猟に用いてよい猟具を判別する「猟具判

別」などの講義が行われたほか、実技試験対策としてわなの設置練習が行われました。

参加した大学生からは、「2月に取得して、実家のタケノコを守りたい!」といった現実的な声も聞かれ、実際に講習会を受講した6人の方が、令和5年度に狩猟免許を取得しています。



▲狩猟の魅力を伝える講演

学生等の狩猟免許取得を促進するため、本年度も引き続き、当講習会の開催を計画しており、令和7年2月の狩猟免許試験の受験に向けて、11～12月頃の開催を予定しています。



▲箱わなの練習をする学生

### 初級者向け研修会

狩猟免許を取得したものの、どのようにわなを仕掛けてよいか分からない、

わなを設置しても捕獲がうまくいかないなどといった課題を持つ狩猟の初級者を対象に、安全で効率的な捕獲技術を学べる研修会を開催しています。

研修会は、座学と実習による2日間の研修になります。

座学では、ニホンジカの生態や生息状況や、ニホンジカやイノシシを捕獲した際の止めさしや解体方法などについて学ぶことができます。



▲くりわなを自作する参加者

実習では、くりわなを市販の部材で一から自作するほか、山に入って、くりわなを実際に仕掛ける練習を行います。

参加者からは、「講師の方と同じことを行うのに3倍以上時間がかかってしまったので、自分で繰り返しやってみて、少しでも近づきたい。」との声がありました。



▲くりわなの設置練習

本年度は、10～12月頃に県内2箇所で初級者研修を開催する予定です。

### 最後に

このように技術レベルにあわせた研修等を開催していますので、御興味ある方の参加をお待ちしています。

## 令和5年度第4回理事会及び県森林・林業関係幹部職員との意見交換会の開催

5月24日、令和5年度第4回理事会をホテルアソシア静岡（静岡市）で開催しました。来賓として浅井県経済産業部理事に御臨席いただきました。

理事会では、次年度の7月からの「令和6年度事業計画及び予算」などについて審議を行い、決議されました。

理事会終了後に、当協会役員と県森林・林業幹部職員との意見交換会を開催し、県から令和6年度の県森林・林業施策についての概要説明を受けた後、意見交換を行いました。主な意見を以下のとおり御紹介します。

### ＜広葉樹林の管理・活用に関する意見等＞

**（協会役員）**生態系保全等から広葉樹林の評価が高まっているので、これを維持・管理することに対して支援すべきではないか。

木材製品を製造する工場の中には広葉樹チップを使用したいという意向がある。一方で伊豆半島では未利用の広葉樹を資源として活用したい意向があるので、県の間伐材搬出奨励事業について広葉樹も対象として欲しい。  
**（県）**道から遠い等のために経営が成り立ちにくい所は森の力再生事業により針広混交林化を進めるなど、生物多様性も確保していく。

広葉樹も有用な資源であると認識。一方で広葉樹の伐採は難しいので伐採技術の向上をセットで進める必要がある。

### ＜森の力再生事業に関する意見等＞

**（協会役員）**森の力再生事業は第2

期・19年目に入った。県民全体で森林を守る良い制度であり、森林環境譲与税とは違う用途となっている。整備すべき森林はまだ多いので、今期で終わりではなく第3期を継続して欲しい。事業は継続するのか？現時点で県が取組んでいることは？保安林も対象として欲しい。

**（県）**評価委員会からは事業は適正に執行されていると評価されている。まずは現計画の令和7年での完了を目指して進める。整備する荒廃森林はまだ多いと聞くので、現況調査や地域の実情に詳しい方々から情報収集していく。

### ＜J-クレジットに関する意見等＞

**（協会役員）**J-クレジットは公有林では取得しやすいが、小規模所有の私有林での取組み状況を伺う。

クレジットの需要状況を伺う。県や市町もCO<sub>2</sub>を排出しているのでクレジットを

購入してもらえば制度の普及につながるのではないか。

**（県）**私有林は森林経営計画作成のタイミングに合わせて取得を進めている。

県では稲梓県営林でプロジェクト計画を登録したので、このノウハウを皆さんに普及する。また、今年度はクレジットの発行、販売を行うので、この成果等も情報提供していく。

### ＜人材の確保に関する意見等＞

**（協会役員）**林業の人材が足りていない。建設会社など林業関係者以外の方の参入に対しての考えを伺う。

**（県）**造園会社、建設会社が参入し、森の力再生事業の整備事業者等として施業している。参入希望する方には、安全面など必要な情報の提供等の支援を行う。

このほか、「森林環境税の徴収が始まる、県からの広報も必要」「森林認証材の利用拡大を進めるべき」「山が売られて残土処理などで山自体が無くなるので対策が必要」「森林の集約・団地化を促進する施策をさらに検討して欲しい」などの意見がありました。

## 木質化で協会の執務室が見違えるような空間に変身!

株式会社ノダ様の御協力を得て、協会の執務室の床に木製の土足用フローリングを布設し、執務室がやすらぎの空間に大変身。

フローリング材は、(株)ノダ様が開発した製品で、静岡県産スギとヒノキのハイブリッド合板に高密度MDFを貼り合わせ、さらに表面に特殊加工したヒノキ突板を貼り合わせた“ハイブリッドなフローリング材”で、耐久性に優れ、凹みキズや擦りキズ、汚れがつきにくく、ワックスがけも不要で手入れが簡単。

木材利用は、やすらぎの空間を創造するとともに、間伐等の森林整備が促進され、地球温暖化防止にも寄与します。県の支援制度もあります。皆さんも住宅や店舗などの建物を木の心地よい空間にしてみませんか!

